

千里の竹の物語

— 竹の過去・現在・未来 —

村上正（正会員 C V V 会員）

竹と日本人とのかわりは、非常に古くからあり、深いものがある。建設材料としてもよく使われてきた。しかるに最近の竹林の荒廃は著しい。そこで竹の再評価を試みた。

吹田市立博物館は2008

（平成20）年度夏季特別展示として、千里の竹を取り上げた。会期は7月5日から8月31日の57日間であった。

千里ニュータウンは美しい竹林を公園や緑地帯に多く残してきた。しかし、それも整備が行き届かず、荒廃してきた。それが、最近それを維持管理するボランティア団体が次々生まれ、竹林を整備するようになった。それが「千里竹の会」、「竹林友の会」、「すいた環境学習協会（SELF）」などである。写真1はその展示会のポスターで、その背後には美しく再整備された千里の竹林がある。

そこで竹についての歴史、竹の文化について、もう一度考察する機

会として、この竹の展示会が催された。

竹と日本人

竹と日本人のかかわりは非常に古い。縄文時代は約1万3000年前に幕を開けるが、早期の土器の表面に竹の文様が施されているものが見られる。竹製品の出土例としては、植物の繊維や薄い板状のものを組み込んでつくったかごやざるなどがあった。竹製の編み物が現れたのは、約5000年前の中期で、伊礼原C遺跡（沖縄県）や、下田遺跡（群馬県）から竹かごが出土している。後期・晩期になると、関東・東北地方を中心に竹製編み物の出土例が多くなる。たとえば、真福

寺貝塚（埼玉県）では極細の竹芯に1・5mmほどに割った竹を組み込んだ複雑なざる編みのかごがある。

弥生・古墳時代には、3世紀頃の日本の様子を記した『魏志倭人伝』において、竹に関する記述がある。縄文時代には弓矢がすでにあったことは、石の鎌（やじり）からわかるが、出土した矢や弓はこれまでどころ木製でカシ類が多く使われている。竹ぐしは古墳時代になると、古墳の副葬品としても出土している。

7世紀になると、新たな国家づくりが始まり、中国の制度や文物を盛んに取り入れた。遣隋使や遣唐使が中国から持ち帰った品々には多くの竹製品も含まれ、中国の詩文などの竹を礼賛する思想に

も触れた。

古代の竹製品の極みは正倉院御物に伝わる笛、笙、尺八などの楽器や花かごなどといえる。

それでは竹は日本人・古代人にとつて、どのように感じられ、どのように思われていたのか。古く神話の時代の『薩摩国風土記』に「皇祖ホノニギノミコトが日向の高千穂に降臨し、竹屋村の豪族の女を娶つて二人の男児をもうける。このコノハナサクヤヒメが出産にあたり竹でつくった刀で臍の緒を切った。その竹の刀を捨てたところが竹林となつて、その地が竹屋と名付けられた」とある。そのほか、竹が人間の生活面で利用され、かわりのあったことはいろいろあるが、なんと

いっても『竹取物語』のかぐや姫は



写真1
千里の竹の展示会のポスター。背後の竹林は市民団体によって整備されたきれいな竹林（提供：吹田市立博物館）



写真2 スラリー粘土で製作されたかぐや姫の一情景(好井千恵子作、提供：吹田市立博物館)

圧巻である。この物語のなかで五人の貴公子がかぐや姫に求婚し、すべて難題をかけられて求婚を拒否されるが、そのなかの四人は実在の人物であり、二人の名の人物は不明であり、その人物を類推するのも

興味あることである。写真2は好井千恵子によるかぐや姫の情景をスラリー粘土で製作したものである。またアジアの各地で類似の物語があり、後漢書の中や四川省の民話、チベットの伝承にもある。

吹田の土木遺跡と出土の竹製品

吹田では、旧石器時代から縄文・弥生時代については、吉志部遺跡や垂水遺跡によって知ることができ、古墳時代については、須恵器生産技術が朝鮮半島から伝播し、吹田は須恵器生産地域として栄え、聖武朝難波宮瓦窯であった七尾瓦窯があり、平安宮初期の瓦窯であった吉志部瓦窯があり、近現代まで続けられた伝統的な瓦生産地であった。

平安時代初期の大遺跡として南吹田に五反鳥遺跡が発掘され、神崎川河口部の背割堤として築かれた巨大な土木遺産が見つかっている。これは数多くの材木柱が打ち込まれており、背割堤の補強のためのものとは考えにくく、何か港湾の船着場か橋梁の橋脚と考えられるものであるが、いまだに土木の専門家の考察がなく、構造物が何であったかは特定されていない。しかし、ここには竹製品の使用は見つかっていない。

かごと思われる編み物の一部がある。これは鎌倉時代初め頃のものと考えられている。

また吹田市内では竹を使った排水施設が見つかっている。その地点は、古代の土地区画である条里制で豊嶋郡と嶋下郡の境に当たるところで、ちょうどその地点の両岸に堤防をもつ排水路があり、その水路は鎌倉時代のものであり、水田に水を引くための配水管として竹を使っていた。水路は延長85mにわたって見つかっており、堤防に取り付く小畦に沿って両岸に合計6個所の配水管があり、土圧により壊れていたが、直径6〜9cmのものであったといわれる。写真3と図1はその配水管と断面図である。

建設資材としての竹

建築材料としての竹の利用範囲は非常に広い。構造材としても装飾材としてもよく使われる。伝統的な貫構法の土壁で、貫の入口構造に小舞竹を棕櫚縄で編み、その上に下塗り、中塗り、上塗りを重ねて壁をつくる。その荒壁土は荒土にわらすさと水を混ぜ合わせ2ヶ月ほど寝かせて粘りのあ

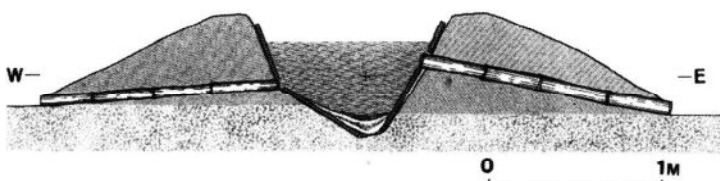


図1 豊嶋郡条里東限遺跡にあった竹製配水管(鎌倉時代)の断面図
(提供: 吹田市立博物館)

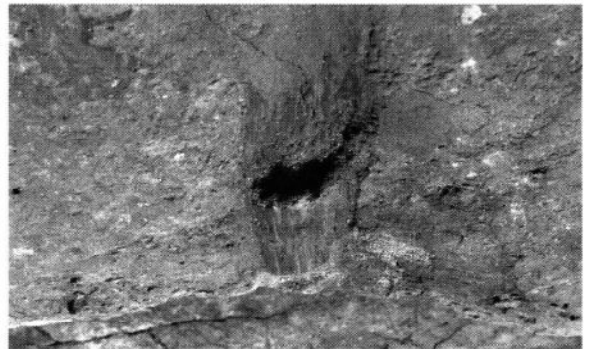


写真3 豊嶋郡条里東限遺跡にあった竹製配水管(鎌倉時代)
(提供: 吹田市立博物館)



写真6 中国蘇州で建設中の住宅の足場として使われている竹(撮影: 村上悠紀子)



写真4 社大な竹の家、トラジャ
(民族学博物館、撮影: 佐藤浩司)



写真5 マレーシアの竹の橋(撮影: 秋元宏)

る土をつくった。また日本では古
来より庭や住宅の装飾として竹
垣が用いられた。

土木材料としては、先に述べた
ような配水管として使用された
こともあるが、最近ではあまり使
用されなくなった。近代になっ
てからは、河川の水制工として竹か
ご、蛇かごが用いられた。それは
形により、ふとんかご、だるまかご
と呼ばれたが、耐久性から鉄線が
用いられるようになり、さらにコン
クリート・ブロック工と変わって
いく。明治の初年にはオランダの技
術者のデ・レーケがヨーロッパの工
法である粗朶沈床そだんしょうじょうを日本で用い
たが、日本の古来の工法である木
工沈床とともに、その細部には竹
が用いられたと考えられる。洪水
はまだ全国でたびたび起こってい
るので、水制工についてまだまだ検
討の必要性もある。人をも寄せ付
けない巨大な消波ブロックも必要
かもしれないが、人の親しめる遊
歩道に竹かごのある風景も再現し
てほしいものである。

鉄道の架線工用のはしごは、
現在も竹製のものを使っている。そ
れは竹は電気の良い絶縁体で
あるからである。

インド、東南アジアにおいて、竹

は建設資材として、非常によく使われている。写真4はインドネシアでの壮大な竹の家、トラジャである。

竹の橋は人道橋などにはかなりの事例があり、写真5はマレーシアの竹の橋であり、鹿児島県にはかなりの事例がある。

インドから中国の南部では建設の架設の足場としてよく使われている。写真6は中国蘇州で建設中の住宅の足場として竹が使われている様子である。

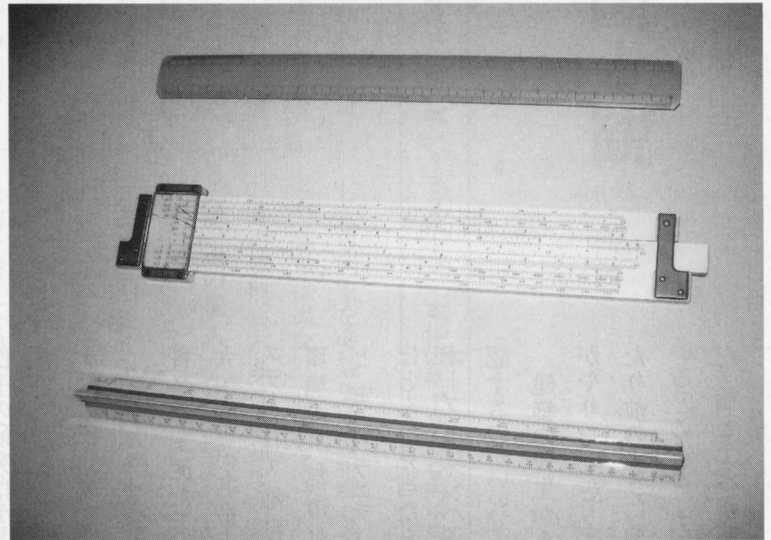


写真7 竹製の計算尺、三角スケール、物差し(提供:吹田市立博物館)

写真7は竹製の計算尺と三角スケールと物差しであり、竹はこのような計測器にもよく使われた。

竹筋コンクリートについては、第二次世界大戦の当時、日本において鉄の供給が極端に減少し、鉄に代わる何かを供給しなくてはならなくなり、竹がその代替役を果たすこととなった。建築では、土壁において小舞竹を芯材に使った技法から、竹筋コンクリートの建物が意外と建てられている。

土木材料としては、鉄筋の代わ

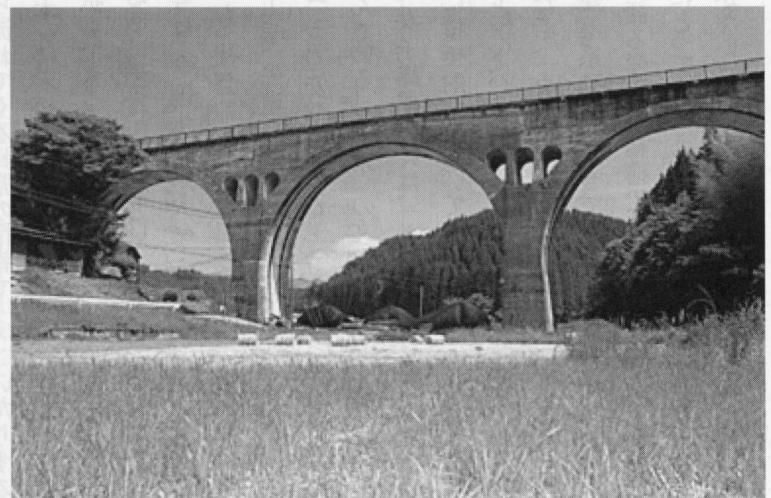


写真8 旧国鉄宮原線幸野川橋梁(提供:熊本県教育庁文化課)

りに竹が用いられたと言い伝えられているものは、多々あるが設計図まで残されているものは少ない。旧国鉄宮原線は、竹を使ったコンクリート製であるとの言い伝えのある鉄道橋梁として、全国には小国町の橋梁を含め3例しかない珍しいものといわれている。当時、この工事に携わった人が「鉄筋の代わりに竹を使った」という証言もあるといわれている。写真8は幸野川橋梁で優雅なアーチ橋である。ここには全部で7基のアー

竹の将来

千橋が残されている。

竹は日本人にとっても世界の人のにとっても、非常に有用な植物であり、その人びとの文化となっており、それを支えてきた。しかるに近年竹が軽く見られたためか、竹林が潰され、痛ましい姿が目につくようになった。その竹の将来を危惧して、竹の専門家によって「日本の竹を守る会」が発足していたが、最近になって市民のボランティア活動による竹林の整備が活発になってきた。このことから、この展覧会が開催された。竹はここで述べてきたように、日本人にとって非常に有用な植物であるばかりか、成長の早いことから多量のCO₂を吸収する、環境にやさしい植物として認識されている。また抽出された化学成分が、消毒、消臭、保健などに用いる薬品として商品化されたり、竹の利用はさらに拡大しつつあり、竹の将来は新たな展望が開かれつつある。吹田市立博物館が竹を取り上げ、特別展覧会を開催されたことについて、われわれ市民や関係者が深く敬意を払っている。